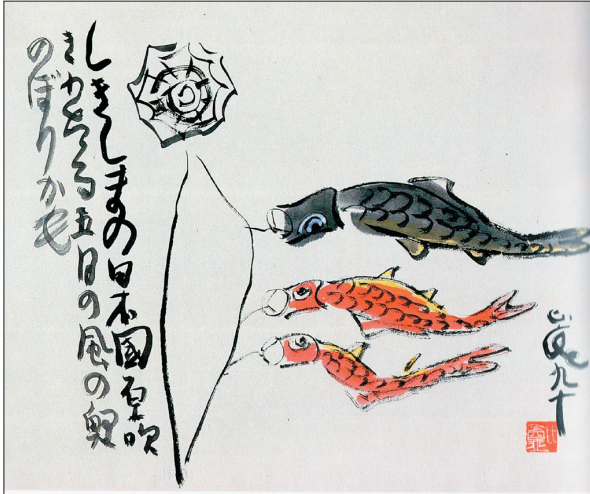


比庵佳境の会



しきしまの日本国原吹きわたる
五月の風の鯉のぼりかも 比庵九十



花意竹情

比庵九十三

二人の「いま良寛」 清水比庵・松坂帰庵

岡山法界院の碑を訪ねて

山本陽一

昨年九月二十七日、高梁市歴史美術館の「広がる比庵の世界」展を見に行く途中、岡山駅から程近い法界院へ立ち寄った。この寺は、かつて比庵と親しく、その書画が高く評価されている松坂帰庵が住職をしていた寺で、比庵の筆になる「帰庵筆塚」や、会津八一や比庵や帰庵の歌碑がある。笠岡の美術商豊池勇さんの車で、清水固さん、ワードン充子さん、吉田耕一さんに私の五名で訪ねた。



法界院門前にて

金剛山遍照寺法界院は、天平年間創建の真言宗古寺で、藤原時代中期作の聖観音が本尊。帰庵はこの寺の三十三世住職を務めた。この度は、まだお若い橋本春峯住職が、にこやかに山門、帰庵筆塚他の諸碑を案内してくださった。先を急ぐ行程だったので、ご本尊や弘法大師像の拝観を略したのは残念であった。

一 松坂帰庵

さて、ここでは法界院の諸碑を紹介しつつ、帰庵の文人ワールドを語るわけであるが、まず、豊池さんからいただいた「遊心無垢の芸―帰庵」（昭和四十八年富岡大二著）から帰庵の略伝を紹介しておく

〔明治二十五年（一八九二年）岡山県英田郡美作町、真言宗安養寺に生まれる。（比庵より七歳年下）本名松坂旭信。初め無得、のち帰庵と号す。大正五年真言宗京都大学卒後、母校にて数年教鞭を執る。昭和五年岡山市三野金剛山法界院の三十三世住職となる。〕
―中略―

法界院復興のかたわら、本山御室派（寺）の宗政に参画する。書は江戸時代仏門の妙筆として有名な慈雲上人に傾倒私淑、技巧を放棄した雄渾素朴な書風を完成した。約二十年に及ぶ京都在住時代、日本画を川仁和虹外、篆刻を園田湖城に学びそれぞれ妙を得、遍刀彫、短歌、作陶等無心無垢の芸は多岐にわたり、あまた香気ある作品を遺す。常に文人墨客と交わり、貴賤貧富となく人と接し、いま大師さんとも、いま良寛さんとも呼ばれ、人々より敬慕された。晩年宗会の決議により御室派の大僧正位を授与された。管長にも推挙されるも、これを固辞する。昭和三十四年入寂。六十七歳。〕

略伝によると帰庵も「いま良寛」と呼ばれた。書画、短歌等の芸と人柄から、そう呼ばれたのであるが、まさに比庵が「いま良寛」とよばれたのも同じ理由からである。この二人が出会えば親しくなるのも当然とい

比庵が帰庵に出した最後の手紙

昭和三十四年七月十二日（帰庵死去の二か月前）
笠岡滞在中、不在時に帰庵が訪問したことへの詫ひ状。
一か月後に帰庵が他界したので再会できなかった。

表面

岡山市三野
松坂帰庵様
今日はまことにまことに相済み
ませんでした。
里庄へ行くべくこれといって車をよ
こされて仕方なくまゐりました。
大雨で十一時にかへりましたが
雨は尤も烈しくありました。
あなたも濡れたらでせう。
すみません。すみません。
大桃 誠に見事で新しくあり
がたうございました。

裏面

青やまのはしより枝をさしのべて
ねむの花さく雨のくれなゐ
比庵

比庵

うべきか。比庵は随筆「紅をもて」の中で帰庵にふれている。帰庵が比庵を心にかけて、毎日のように手紙の往来があったこと。比庵が笠岡に帰っていた時、留守に帰庵が訪ねて来たこと、比庵は

「いちばやく訪ねたまひしこのあいだ逢ふことできずとこしへに今は」

と帰庵を追悼している。このほか比庵の帰庵への挽歌に次の歌がある。

ほがらかに死ぬまでおはしたまひしと聞くだに世には得がたかりしを逝きましてはや一年はめぐり来ぬ

思ひつゞけてなほはやかかも桃さへも思出となるうまき桃

食うることに哀しみとなる

比庵が会津八一と対照されて話題になると、帰庵は両方の作品を見比べてほほ笑んでいたという。

二 法界院の比庵・八一・帰庵の碑

法界院は北に山を背負っている。古い二層の山門が山裾に立つ。二層に掲げられた帰庵筆の「金剛山」の横額が出迎えてくれる。慈雲張りの筆太で堂々と、しかも肩肘張らぬ書。山門をくぐると石段があり、その登り口に梵鐘の形にくり抜いた比庵と八一の歌碑がある。右に比庵、左に八一。

金剛山法界院の鐘の音の

諸行為楽の朝あけにけり

「諸行為楽」がこの歌の要。諸行無常では常識的で歌にならない。諸行は無常であるか



比庵歌碑 金剛山

らこそ、楽しく生きる心掛けを佛は説くと比庵の歌は示唆する。毎日佳境に通じる歌であ

る。一方秋艸道人会津八一の歌碑は四国の五刹山人栗寺の梵鐘に鑄込まれた書体を刻んだもので、鑄造を考慮して、筆太に書体を強調した仮名。帰庵は八一とも親しかった。

わたつみのそこゆくうをのひれにさへひびけこのかねのりのみために 秋艸道人

海―底―魚―鱭と視点を絞り、海底を泳ぐ魚の鱭先にまで鐘の音よ伝われと、つまりこの世は全てのものに佛の功德あれと、鐘によびかける。「うをのひれにさへひびけこのかね」は八一の感受性の一面である繊細さを示す。

「の」音が鐘の余韻のように快い。石段の登った右手に、八一の唐招提寺の歌碑と同じ筆跡を縮小した碑がある。

おほてらのまろきはしらのつきかげを うちにふみつものこそおもへ 八一

左手には、帰庵のこぼを刻んだ、ものさびた詞碑が立つ。

よいことをすればいつまでも楽しい 小学生にも読めるすなおな書体。法話に出て来そうなことばであるが、その書風にも道徳的な押しつけがましさがない。

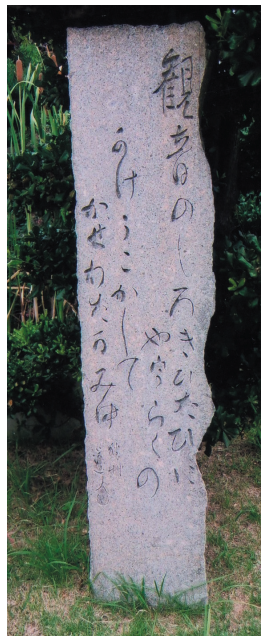
二天門を入ると平場があり、左手の築地塀を背にして、比庵の書になる「帰庵筆塚」の碑がある。帰庵の没後まもなくの建立か、古びている。比庵・帰庵の絆のモニュメントでもある。

平場から本堂に登る石段の下に、八一の半折大の歌碑が立つ。これは斑鳩法輪寺の聖観音の歌碑と同じ歌を刻む。法輪寺の碑は全て



帰庵筆塚

このあさけめざめてきけばねむりより さいめたるこのこゑさやかなり 帰庵



八一歌碑 観音の

ひらがな書きであるが、これは漢字まじりなのが珍しい。

観音のしろきひたひにやうらくの かげうごかしてかぜわたるみゆ 秋艸道人

「しろきひたひ」が感能的。そこに宝冠の飾り金具の瓔珞の影が、かすかな風で揺れている、という発見。これも八一の繊細な感覚を遺憾なく發揮した歌。法界院の本尊の聖観音に捧げるために建てられたものである。

お茶堂の前には、半円形のかわいらしい比庵の「ありがたや」の歌碑がうづくまつている。

ありがたや ありがたや ただありがたや ありがたや ありがたや ありがたや ありがたや

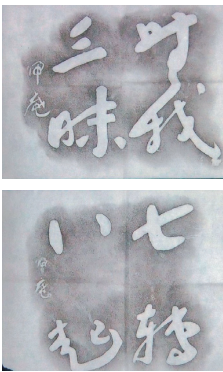
平場の右手奥、石垣の前に帰庵歌碑がある。

このあさけめざめてきけばねむりより さいめたるこのこゑさやかなり 帰庵

帰庵の書は大字の漢字は慈雲張りの簡潔雄渾な書風だが、自作短歌や短いことば（法話に出てきそうな標語的なもの）は、ひらがなの単体で、すなおな仮名書法。この碑も、連綿や変体仮名を使わない単体で、さらりと書



帰庵歌碑 このあさけ



帰庵書の拓本

動揺しない状態の事。「七転八起」は僧としてさまざまな諸問題に対処しつつ現実社会を生き抜くための座右の銘か。

以上紹介した比庵、帰庵、八一などの碑はいずれも、極めて質素に、小ぶりに作られていて、心を寄せるにふさわしい造りであった。以上

いている。書体はなんとなく八一に似ている。八一のひらがなは流麗な線質であるが、やや肩をそびやかしている。帰庵のひらがなは、誇張せず、あつけないくらい灰汁がない。また、歌意も小・中学生にもわかる。あたりまえのことを述べているようにしか見えないことばを並べて一首の歌にしている。余程澄んだ平常心の持ち主でないか、こういう平明な表現で歌を作る勇氣は出ないものである。

本堂の裏山は墓地で、てっぺんの雑木林にかけて、八十八ヶ所のミニ霊場を辿れるようになっていて。そのてっぺん近くの石垣に帰庵の書(美濃半紙判ほどの大きさに漢字四字)が二点刻まれている。

「無我三昧」「七転八起」これは慈雲張りとまではいかぬが、筆太の簡潔な書。「無我三昧」は、書画・短歌を楽しむ文人としての心境。

三昧とは仏語で、心を一つの対象に集中して

以上

比庵さんとの接点

東京外国語大学・鶴見大学名誉教授

志村 正雄

清水比庵さんとは直接の接点、間接の接点があつて、そのことを書かせていただきま

す。私が直接にお会いしたのは一九五九年の秋のことでした。それまで私は比庵さんについて何も存じ上げなかつたのですが、福井市の山田祖舟さんが上京されて、私にぜひ会わせたい偉い書家、歌人がいるから、一緒に会いに行こうとおっしゃって、まず比庵さんの作品が掲載されている近代書道研究所、昭和三十四年九月発行の「八一」と比庵の作品特集」を下さつたのです。私は八一については知つていましたが、比庵については何も知らず、この冊子によってたちまち比庵ファンになつてしまつたのです。

ちよつと山田祖舟さんについて説明しますと、この方については比庵さんの随筆集「紅をもて」（昭和四十四年）に福井の書画人Y氏（一〇九頁）として紹介されているのが、その人です。

「この人は画と書を兼ねてゐる上に歌を作る。それで比庵のあとつぎだと冗談をいつてゐる。」と比庵さんは説明し、さらに同書の二一五頁にも越前福井のY氏として言及されています。

比庵さんが他界されたのちに出版された随筆集「水清き」では一六三頁に、今度は実名を出して、福井の山田君から「比庵いろは帖を入手したといふ手紙が来て、人間九十にもなれば自然に神仙といふ趣が加はるものであるやうだ、と書いてある。」と比庵さんが書いています。

この山田さんの紹介で私は曹洞宗の本山、永平寺で十日ほど修行僧として訓練させてい

ただいたことがありました。比庵さんは福井の「N氏」や「Y氏」について「この人たちは永平寺内を自由に通り抜けて直ちに管長に会へる人たちである」（「紅をもて」二一六頁）と書いていらつしやいます。まだ永平寺が今日のように（噂に聞くところでは）観光化される以前の昔話です。

こういう繋がりです。山田さんに連れられて私は山手線の駒込駅で下車、サクラの染井吉野の発祥の地として有名な染井墓地のほうへ連れて行かれ、おや、これは私が何年間か母校の東京外語へ通つた道ではないか、もうすぐ染井能楽堂に出るはずだ、という地点で私たちは右に曲がり比庵さんのお宅に到着したのです。

玄関を入つてすぐの階段を登ると、左側に比庵さんの仕事部屋があるので、その入り口のところに屏風があつて、それが「比庵佳境の会」の会報第8号（二〇一七年十月）の四頁に写真と解説が載つている「正月雀」の屏風です。

考えてみますと、その仕事部屋に入つて比庵さんとどんな話がか、交わされたか何も覚えていないのですが、出されたお茶の台に比庵さんの絵があるのに気が付いて感心し、しかし感心と言へば、やはり何よりも「正月雀」の印象が深かつたことが記憶に残つています。

考えてみますとこのとき比庵さんは七十六歳、私は三十歳になつたか、ならぬかの頃で、その年の十二月にも私は永平寺に行く予定にしながら、北海道のニセコアンヌプリの山スキーで怪我、一カ月療養を強いられて、ついに永平寺行きを諦めたのでした。

年が改まって一九六〇年になると、私は米国文学研究のためにニューヨーク大学（NYU）の大学院英文科に留学することが決まり、それから六年ほど日本を離れてしまひました。

六年ぶりに日本に帰り、それから四、五年

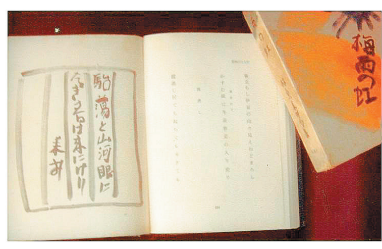
して母校の東京外国語大学英米科の専任として教えることになつたので、比庵さんにお会いしようと思へば、地理的にはいつでもおあいできたかもしれないのですが、大学は紛争時代に入り、さまざま慣れぬ仕事に忙しく、関係学会の役員なども引き受けていたので、小人の情けなさ、ゆつくり比庵さんにお会いできるような心の余裕が私にはありませんでした。一、二度染井墓地の中の通路でお姿を拝見し、一礼したことはありましたが、一度お会いしただけの私をご記憶のほうはありませんが、無言で道を急いだ記憶のみ残りしました。

ところが比庵さんとの関わりは、直接的にはそれだけですが、間接的にはそれだけではありませんでした。英米語学文学関係の出版を専門とする南雲堂の編集者Hさんが、あるとき林原未井（らいせい）さんのことを話題にしました。林原さんは米国の作家ヘミングウェイの「老人と海」の注釈書を南雲堂から出版なさつていて、その頃NHKラジオ番組で私が「老人と海」を担当したとき、林原の注釈が当時としては最も良心的に出来ていることに感心しました。実は林原さんが夏目漱石家の書生であつたことも知らなかつたのです。なぜ？ 私が小・中学

比庵は林原未井の句集「蘭鑄」の巻頭の折込み挿絵に、面賛として未井の句を書いた。蘭鑄の瘦せたれど風邪ひかざらむ 未井



比庵の挿絵 蘭鑄の



比庵の挿絵 驗蕩と

句集「梅雨の虹」の中の比庵の書による未井の句 驗蕩と山河眼になき春は来にけり

生のころ、わが家にあつた漱石全集の書簡集巻には林原さんの姓名は「岡田耕三」となつていたからなのです。

私は一九六六年から三年間、英文学者の松浦嘉一さんと縁があつて、松浦さんが科長をなさつてゐる鶴見大学英米文学科の専任になりました。松浦さんが林原さんと共に東大英文科で漱石の最後の学生であつたことは知つていました。しかしその林原さんが即ち岡田さんである、とか、その林原さんが比庵さんが高く評価しているなどのことは全く知らなかつたのです。そのことを最初に私に教えてくれたのが林原さんの六冊の句集を出版している桜楓社、その姉妹出版社の南雲堂のHさんでした。

そのHさんが林原さんのお宅へ行って漱石の話でも伺いませんかと言うので、当時漱石の日常について伺いたいこともあり、二人でお邪魔したことがあります。そのとき、林原さんが比庵さんと親しく、比庵さんからの絵入り年賀状を枕屏風に仕立てて寝室に置いてあるという話題になり、その小さな屏風に十枚の比庵さんから林原さんへの絵入り年賀状を貼つたものを見事にHさんも私も感心としおでありました。その

後です。林原さんの最初の句集「蝸」を除いて残りの全句集の装丁、挿絵等がすべて比庵筆であることを知り、比庵さんのデザインの手腕のほどに打たれました。いま私は未井さんから献辞入りで頂いた句集「残照」を始め林原さんの全句集が手元にあります。それを眺めていると、比庵さんのデザイナーとしての腕前にも一驚する次第です。もう一つ第三者を紹介

ての比庵さんとの繋がりを申しませう。私は職業的翻訳家ではありませんが、かつて米国の小説家ピンチョンの「競売ナンバー49の叫び」という小説を依頼されて翻訳したことがあります。(現在は筑摩文庫に入っています。)この小説は主人公の主婦エディバが「タッパーウェア・パーティー」から帰ったところから始まります。「タッパーウェア」というのは一米国で開発されたポリエチレン製の密封保存器 主婦のホームパーティー方式で「販

売店経由でなく直接販売されている」と研究社の新英和大辞典に解説されていますが、この一般の店を経由せず、主婦から主婦へ、ホーム・パーティーを開いて販売する方式が一九五〇年代後半から始まり、これが大いに当たったのです。ピンチョンはアンダーグラウンドで庶民の間に拡がる隠れたコミュニケーションというテーマをこの小説の主題にしているのですが、それはともかく、このタッパーウェア支部である「日本タッパーウェア社の社長(米国人)」から比庵さんは「代々木原宿のビラビアンカの七階の一室の壁に、身体障碍者の小学三年生の児童の詩を大書することを頼まれた。」というのですね。

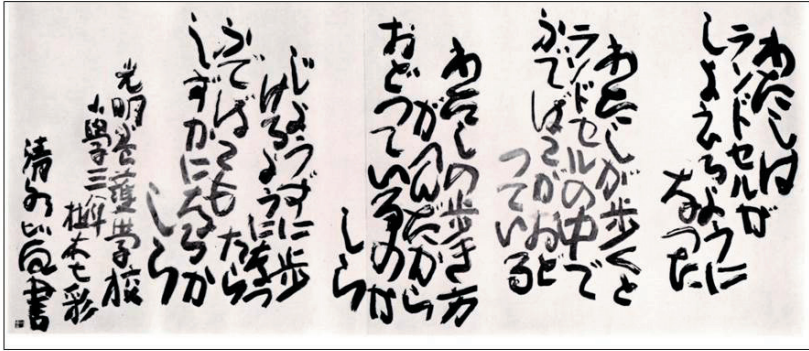
わたしは
ランドセルがしよえる
ようになった。

わたしが歩く
ランドセルの中で
ふでばこが
おどっている

わたしの歩き方
へんだから
おどっているのかしら

じょうずに歩けるよう
になったら
ふでばこも
しずかになるかしら

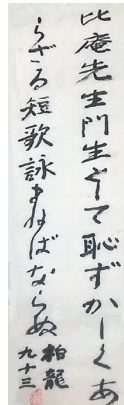
光明養護学校
小学三年 松本七彩
清水比庵書



「自分の歌を大書するな
らいいが、子供の全部平仮
名の詩(新仮名づかい)で
書くことに苦労したが、傍
らの書家も驚くべき迫力だ
とってくれ、それから後
に社長も見て、大変よとい
って満足して下さったとい
ふことで有難いと思っ
た」(紅をもて「二〇九頁」
「日本独自の、この詩の
芸術がどうかして外人に受
け入れられたものだと思
っている」と書く比庵さん。
この詩をはじめこんだ壁の前
で社長が米国からの客人の
応接間に飾るということ
で書いたこの文章はタッパ
ーウェア・パーティーから始
まる小説の訳者としても感慨
無量でありました。

清水比庵先生と二宮柏龍先生

岡山市立西大寺公民館書道講師
杉本頼子



「比庵先生門生として恥ずかしくあ
らざる短歌詠まねばならぬ」

この歌は私の書の先生である二宮柏龍先生
の九十三歳の時に詠まれたものです、先生は
平成二十四年十一月九十七歳で他界されま
したが、生前数少ない比庵直弟子の一人である
ことが御自慢でもありました。

書をする者は歌を詠みなさい。
歌は口から自然について出たようだけ
ればいけない。
自分に合った内容を書かなくては生きた
書にならない。
など教わった一つ一つが比庵先生の教えで
もあったのです。

岡山市平井の二宮邸の大石で築かれた池の
庭には
人を恋ひ世を恋ひこれは岡山の

平井の君が庭の池のこひ 比庵九十叟
と歌碑が静かに建っています。比庵先生が



二宮歌碑

泊まれた時着ら
れたチャンチャン
コも大切にされて
いました。お二人
の親交はいかばか
りだったことでは
よう。

岡山県では比庵先生の生まれ故郷の高梁
市、妹章子様の嫁ぎ先で先生と関係の深い笠
岡市、それに岡山市で比庵展が色々開催され

ます。私は書の勉強のために展覧会に足を運
んでいる内、比庵先生の書が私のお気に入り
ています。

比庵先生は「書より絵が易しいと絵を書
けば絵が難しく、絵より書が易しいと書を書
けば書が難しく」と言われています。自然体
であると見える絵や書や歌の一つ一つがどん
なに推敲を重ねて出来上がった作品であるう
かと推察できるといふものです。

我部屋に比庵老松の堂々とした幹が天に向
い、松の葉が動き出しそうな勢いで画かれた
お軸を掛けてあります。

やうやくに白み染め多(た)る
空に志(し)亭(て)富士は黒く毛(も)
雲をか婦(むす)羅(ら)敷(ず)

比庵七十八
と富士山を画かざして富士が見えて来ると言
う深みのある作品となっています。



比庵老松 78歳

九十歳を超えて若々しい艶のあるまるやか
な線質と、悠々たる太い筆脈の大胆にして落
着きのある書は、做ねてみてもどうにかなる
ものではなかつたです。

まだ比庵先生を知らない人も、知っては
いるけど気に止めていない人には、是非作品を
多く見てもらいたいと思います。六月二十一
日(木)〜二十六日(火)まで東京大崎のウ
エストギャラリーで清水比庵展が開催されま
す。私も感動をもらいに出かけようと予定し
ています。

今ではお会いすることが出来ない二人の先
生ですが、私にとつて「生きていく道標」と
なって下さっています。良い師に出会えた事
が宝物なのです。七小路を前に宝物を大切に
育てて行こうと楽しみでもあります。

以上

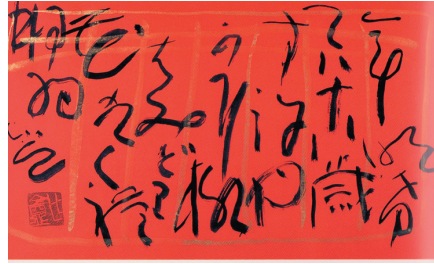
清水比庵の歌 (四)

「窓日」編集長

秋葉 貴子

年明けて八十八歳すこやかに
柳はみどりはなはくれなゐ

清水比庵は明治十六年二月八日岡山県高



梁町（現在高梁市）に誕生、
たまたま旧暦の元日であった。本名は「秀」である。昭和四十六年に満八十八歳を迎えたとき、次のようなことをのべている。
「小生の歌、画、書は、日本の国民性の上に立って、

国民に分かり、国民に親しまれるような歌であり、画であり、書である。国民にわかるような芸術、之が至上の芸術の建前であるとは言わないが、いわゆる芸術家と自称している人達の唱える理屈入りの芸術に比べれば、その純度に置いて比較にならないと思っている。之は自然にそこへ到りついたもので、八十八年長生きをしているところから自然に到りついた小生の芸術境とも、老人境ともいべきものであろう。
小生はよく人から長生きの秘訣とは、と聞かれるが、或いはこの芸術境が即ち長生きへの道であるかも知れない」
今にして心打たれる言葉である。

比庵と生まれ故郷高梁

比庵佳境の会会長

清水 水回



清水比庵は明治十六年二月八日岡山県上房郡高梁町弓之町（現高梁市）に誕生、

に清水質（ただし）・スエの長男として生まれた。この日が旧暦元旦であったため元旦生まれとされる豊臣秀吉の名に因んで秀（ヒデ）と命名された。号の比庵は子供のころヒーヤンと呼ばれていた事に由来する。

比庵は生まれ故郷高梁を愛し、いろいろなものを遺しており名誉市民になっている。高梁市も比庵没後も、その足跡を讃えて清水比庵記念室建立、作品展の催しなど現在に至るまで尽力してくれている。そこで比庵と高梁についてまとめてみた。

一 比庵の祖父壽介（ジュスケ）と父質（タダシ）

比庵の祖父清水壽介（一八三〇～一八六一）は備中松山藩藩士で文武両道に優れたいわゆるイケメンであったらしい。同藩の新陰流師範に剣を学んだ。一八六〇年に壽介が同僚とともに藩士に与えた新陰流皆伝書が高梁市に残っている。しかし三十二歳の若さで他界し高梁市の松蓮寺に墓がある。

比庵の父質は従って十歳で父（さらには母）を亡くしたので祖母（壽介の母）コノに育てられた。コノは比庵の曾祖母になるが、長命で比庵が十歳の時に九十三歳で亡くなったが比庵を可愛がってくれたらしい。

質は漢詩を学び、号を溪外と称した。漢詩を紙に大書して襖に張って眺めていたそう

で息子の比庵が書く字を見て「この子は字が下手だ」と嘆いていたそうである。比庵は和紙を綴じた手製の帳面にぎつしりと細かい字で漢詩が書かれていて、表紙に「溪外遺稿」と記してあるものを大切にしていた。質は比庵が中学生十五歳の時、笠岡で四十六歳で他界した。

二 秀の誕生

比庵（秀）は清水家の長男であるが、「本当は男の子が生まれたが直ぐ死んでしまったので曾祖母コノがこれを案じて金毘羅様に願を懸けて授かったのが私だ」と比庵は云っている。

比庵の祖父壽介の兄（比庵の大伯父）は歌人で、比庵の誕生のお祝いの紅木綿に歌一首を添えた。

きよらかに燃え出でにける幼な児の
行く末永くひいでもすらん

二句の「燃え出でにける」はお祝いの紅木綿に掛け、「ひいでもすらん」は名前の秀と生れた時が朝日が上っていた時でその日出と掛けたものである。日出という字は父質も秀という字に代用して比庵の名を日出とよく書いていたそうである。

後に比庵の母スエの遺品の中から「秀」命名の曰くを記したものが見つかり、高梁市歴史美術館に保管されている。「清水溪外男子を筆ぐ」という書き出しで、「命名を頼まれて秀と名付く。温厚篤実にして学に秀で、豊臣秀吉の如く、天下を取る人となるであろう」という意味の文書が、立派な筆跡で一枚の奉書に記されていて、撰者の名前も明記している。

三 学生、勤め人時代

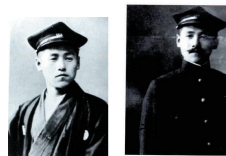
比庵は尋常・高等小学校卒業後高梁中学に進んだ。（当時の小学校は尋常科4年・高等科4年）

その頃笠岡町（現笠岡市）の裁判所書記をしていた父質が病死し、比庵は遠縁の福西家に書生として住込み、生活費・学費の援助



六高時代の清水比庵

を受けた。更に第六高等学校（旧制）から京都帝大に進学したが、この段階では寮生活なので故郷高梁町から離れている。以後判事、銀行員、製造業を経て四十六歳



京都大学時代の清水

で栃木県日光町の町長となった。この間の高梁との交流の詳細は不明であるが、懇意な縁者や友人との文通等はしていたようである。

一方比庵の母スエは未亡人として夫と暮らした笠岡の家に住み続け、妹章（ユキ）も笠岡に嫁いだので、比庵は勤め人時代は母と会うために笠岡訪問は繰り返している。更に昭和十七年（一九四二年）妻鶴代が病死した時に悲嘆にくれた比庵を慰めるために妹章が一時的に笠岡に連れて行った。戦争激化の昭和十九年末から昭和二十年三月にかけて清水家は比庵以下総勢七人が笠岡に疎開し、昭和二十二年まで滞在した。同年末に帰京してからは比庵は疎開中に知り合った多くの歌仲間との交流のため毎年妹章の家に三か月程滞在している。この生活は章が他界する昭和四十年（一九六五年）まで続き、比庵の芸術発展の礎となった。従って比庵は笠岡を心のふるさと、芸術のふるさとと書いている。

四 高梁との交流が深まった晩年

高梁との交流が深まったのは妹章が他界した頃からであり、高梁周辺にも多くの交流人が出来た。特にA旅館の主人は熱烈な比庵ファンで客室に「比庵の間」「三溪の間」を作り、また比庵が泊った別館に歌碑も作っている。晩年には故郷高梁にただ一人人生残っていた少年時代の友人Hが死んだ悲しさと回顧

を次のように詠んでいる。

ただひとり残りてありし友死にて

山河ばかりわがふるさととは

ふるさとの人は年老いてよく語り

よく喜びぬなつかしきかも

高梁市には比庵の歌碑が七基あるが、有名なのは昭和四十三年に松山城のある臥牛山麓に建立したもので、歌会始の御題「川」に因んで高梁川を詠んだものである。高梁川の支流の河原からの採石に、八十六歳の比庵が直に揮毫したもので、付添った一人娘の明子（私の母）が父のエネルギーに驚嘆したと随筆「比庵あけくれ」に書いている。



比庵歌碑 水清き

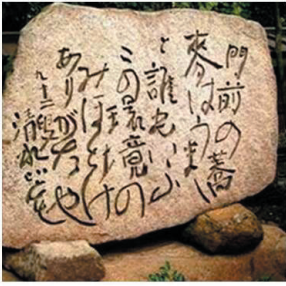
水清き川の流れて山高し日は山を出で川をわたるも

このほか生前最後の歌碑（昭和四十九年・一九七四年建立）が東京調布市深大寺にあるが、これも高梁川の河原から採石し直書したもので、比庵は自分の芸術の総決算だと言っている。

門前の蕎麦はうましと誰もいふ

この環境のみほとけありがたや

門前の蕎麦はうましと 誰もいふ
この環境のみほとけありがたや
九十二夏 清水比庵



直書

高梁市は比庵の芸術活動を評価して昭和四十六年（一九七一年八九歳）に名誉市民に推戴している。これでは比庵は昭和三十三年に推戴された日光市と二つの市の名誉市民になった。

比庵は風景画の作品を戦後（七〇歳頃）から描き始め、多くの作品を残している。山・小川・山路・林・海などに複数の人を点描したものが多く、これらは高梁や笠岡の自然を想定して描いたものである。海が描かれているのが笠岡、無印の歌を見ても比庵の故郷への想いが伝わってくる。比庵の生家の柿の木を詠んだ（描いた）



ふるさと
ふるさとに松山多し
松山に春風吹けば
松風の音もなほ
秋山は春も見えし
秋も過ぎぬ
比庵

ふるさと(2)
ふるさは歩きゆけるといふ
山ありみずあり語るのあり 比庵七十六



わかしわ住みた家の柿の木は
いまも生けて路より見ゆる
比庵八十八

小品もある。

五 比庵他界後の高梁

比庵は昭和五十年数え九十三歳（九十二歳八か月）で他界したが、その後高梁市は歴代市長が比庵ファンであったこともあり、いろいろな催しが官民両方でなされている。平成九年（一九九七年）高梁市文化交流館新設、二階を歴史美術館とし、以後毎年のように比庵展を開催して、昨年（平成二十九年）までに十九回に達した。

平成十六年、文化交流館に隣接する総合文化会館内に比庵作品を常設する清水比庵記念室を建立。この間比庵の娘清水明子は二百点を超える比庵作品や関連資料を寄贈した。

平成十三年、高梁比庵会が短歌の部に「清水比庵大賞」を設立し、以後隔年ごとに開催している。お知らせにも記載するが、昨年実施した第九回比庵大賞の結果は次の通りであった。

応募作品・六百二十八首
清水比庵大賞
ほとほどの大雨ならば歓迎です
福島をきれいに洗ってください

特選（高梁市長賞）
池に照る光を突（つつ）くせキレイよ
慎め今日は原爆の日ぞ

特選（高梁比庵会賞）
空めがけぐんぐん伸びる苦瓜の
葛は揺れつつ風をも掴む

清水比庵展のお知らせ

◎今年の清水比庵展

今年は一月に横浜墨の美術館で例年通り比庵展が開催されました。また六月には東京大

崎で開催を予定しています。

墨の美術館での比庵展は、従来毎年一月に実施されてきましたが、明年は暖かくなつてからの考えもあり、目下来年の実施日が確定していません。次号（第10号）で詳細をお知らせします。

来たる六月二十一日（木）から六月二十三日（火）に東京大崎のウエストギャラリーで清水比庵展を予定しています。昨年も実施しましたが、今年は昨年展示品とは異なる作品を主体に検討しております。詳細は別途お知らせします。

◎高梁比庵会の「清水比庵大賞（短歌の部）」

本文「比庵と生まれ故郷高梁」でも紹介しましたが、高梁比庵会では平成十三年に「清水比庵大賞（短歌の部）」を創設、全国から短歌を募集してきました。隔年ごとに実施して昨年で第九回目となりました。次回（来年）です。次号で詳しく紹介します。比庵佳境の会の会員から参加されて入選した方もいます。どなたでも参加できるので短歌をお好きな方はごぞつてご参加ください。

会費納入のお願い

30年度の会費を納めていない会員の方は下記に納入されますようお願い致します。
一口、1,000円（複数口歓迎）
三井住友銀行鶴見支店普通 7061558
名義 クボタノブユキ

比庵佳境の会

会長 清水 固（清水比庵の孫）
〒247-0022 横浜市栄区庄戸 3-5-18
TEL&FAX 045-893-8932
URL: <http://www.hat.hi-ho.ne.jp/katashi-shimizu/>
幹事：比留間 哲生
〒247-0022 横浜市栄区庄戸 3-25-7
TEL 090-4608-0488